

仏教章修得に向けたテキスト

— 仏教章を胸に —

浄土真宗本願寺派
スカウト指導者会

目 次

はじめに	1
I. 仏教章（宗教章）の意義	2
1. 仏教章（宗教章）のめざすもの	
2. 「ちかい」と「やくそく」について	
3. 「おきて」について	
II. 宗派（宗名・宗祖など）について	4
III. 作法	5
1. 仏壇の荘厳法について	
2. 合掌・礼拝の意味	
3. 合掌・礼拝の仕方	
4. お焼香の意味	
5. お焼香の仕方	
6. 仏旗の意義と扱い方	
IV. 行事について	8
1. 仏教一般の行事	
2. 浄土真宗の行事	
V. 釈尊の伝記	11
VI. 仏教の教え	14
1. 仏教のめざすもの	
2. 縁起の教え（仏教の根本原理）	
3. 四諦（四つの真理）と八正道（八つの実践方法）	
4. 法印（三法印・四法印）について	
VII. 親鸞聖人の伝記	18
VIII. 真宗の教え	20
1. 阿弥陀如来の本願	
2. 阿弥陀如来と釈尊	
3. 聞くということ	
IX. スカウトの心得	23
1. 「教章」の「生活」の意味	
2. 「教章」の「宗門」の意味	
X. 浄土真宗の生活信条	25

はじめに

本願寺派スカウト指導者会では、親鸞聖人750回大遠忌を機縁として、『浄土真宗本願寺派スカウトハンドブック』（以下、『ハンドブック』と略称）並びに仏教章の修得にかかる細目についての改訂を行いました。

『ハンドブック』は、仏教章の修得や研修会等で活用することを目的として編纂されたものであり、その内容は多岐にわたる情報が取載されています。

その『ハンドブック』に記載されている内容を精査し、なかでも、歴史や教義に関して、主要であると考えられる事項を重点的に取り上げ、中学生から高校生を対象とする新たな解説を施して、仏教章の修得のための手引書となるよう、『仏教章修得に向けたテキスト—仏教章を胸に一』（以下、『テキスト』と略称）を編纂しました^①。

また、この『テキスト』の作成にあたっては、年少のスカウトについても、できる限り浄土真宗の教えに親しむ機会を多く設ける必要があると考え、年長のスカウトの協力や、指導者の指導のもとで、新たに付している解説の読解を促して、ともに学べるような内容に改めています^②。

こうした取り組みを続けるなかで、仏教章に対する意識を高め、修得者が増えることを願っております。

註記① 細目については、学習の要点が明確になるよう考慮し、実践記録も3カ月から2カ月に短縮することができます。この他、仏教章を修得したスカウトは、本願寺派スカウト指導者会が主催する研修会に参加していただきたいと考えています。

なお、仏教章の申請にあたって、ボーイスカウトの有資格者は、ボーイスカウト日本連盟の規程の通り1級スカウト以上とします。

② 仏教章の修得にかかる細目のなかに、年少のスカウトも取り組めるよう、新たに項目を設けています。細目表に*印を付していますので、その部門から取り組みを始めていただきたいと思います。

I. 仏教章（宗教章）の意義

1. 仏教章（宗教章）のめざすもの

スカウトの進歩（課目）である技能章やバッジは、社会に貢献するために、自らの技術（技）や知識を磨くものですが、仏教章（宗教章）は、阿弥陀如来の教えを聞いて、自らのものの見方や考え方を振り返る機縁となるものです。ですから、仏教章（宗教章）は、技や知識を蓄える技能章やバッジとは異なり、阿弥陀如来のおこころを鏡として、スカウトとしてのあるべき姿を学ぶものです。

2. 「ちかい」と「やくそく」について

「ちかい^①」や「やくそく^②」は、阿弥陀如来の尊前で、すべての人々に信頼されるスカウトとなるという決意を表すものです。阿弥陀如来のおこころを鏡として、常に自らの心を振り返るとい姿勢を貫いているスカウトは、自然に周囲の人々から信頼されるようになるでしょう。これがスカウトとして「ちかい」や「やくそく」を立てる意義なのです。

数多くの記章や標章を胸に付けることが、スカウトの目標ではありません。それらは、周囲の人々を大切にするという証です。このことを忘れたなら、きっと信頼を失ってしまいます。浄土真宗の教えを聞いて、謙虚な姿勢を貫いて活動しているところに、「ちかい」や「やくそく」を立てているスカウトのあるべき姿をみることができるようでしょう。

3. 「おきて」について

ベーデン・パウエル（Baden-Powell）卿（1857-1941）は、年少の頃からの経験を生かして、野外生活を向上させる技能だけでなく、一緒に活動するための仲間と、どのように付き合っればよいのかということを考えていました（班制教育）。

それは、周囲の人々のことを考えて行動することのできるスカウトを育てたいと

いう強い志^{こころざし}にもとづくものであり、さらには、世界に貢献することのできるスカウトを輩^{はいしゅつ}出したいという大きな願いにもとづくものであるのです。

「おきて」^③とは、「ちかい」や「やくそく」を立てたスカウトが、豊富な技能をもとにして、社会のなかで貢献するための実践内容を示すものです。しかし、技能というものは、「おきて」を実践するための手段ですから、それを身につけることが目的ではありません。

私たちは、阿弥陀如来のおこころを鏡として、自らの心を振り返るという「ちかい」や「やくそく」にもとづきながら、「おきて」の実践^{かんこう}を敢行し、班員はもちろん、家族や地域の人々に対して、貢献してゆくということを忘れてはならないでしょう。

註記①「ちかい」については、本願寺派スカウト指導者会発行『本願寺派スカウトのための「ちかい」と「おきて」の意味』の「ちかいの意味」(6頁)を参照^{さんしやう}してください。

②「やくそく」については、『本願寺派スカウトのための「やくそく」と「おきて」の意味』の「やくそくの意味」(6頁)を参照してください。

③「おきて」については、『本願寺派スカウトのための「ちかい」と「おきて」の意味』の「おきての意味」(16頁)、『本願寺派スカウトのための「やくそく」と「おきて」の意味』の「おきての意味」(10頁)を参照してください。

II. 宗派(宗名・宗祖など)について

1. 宗名：浄土真宗

2. 宗祖：親鸞聖人

(ご開山) ご誕生 1173年5月21日 (承安3年4月1日)

ご往生 1263年1月16日 (弘長2年11月28日)

3. 宗派：浄土真宗本願寺派

4. 本山：龍谷山本願寺(西本願寺)

(所在地 京都市下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町)

5. 本尊：阿弥陀如来(南無阿弥陀仏)

6. 聖典：釈迦如来が説かれた「浄土三部経」

①『仏説無量寿経』(大経)

②『仏説観無量寿経』(観経)

③『仏説阿弥陀経』(小経)

◆宗祖親鸞聖人が著述された主な聖教

『正信念仏偈』(『教行信証』行巻末の偈文)

『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』

◆中興の祖蓮如上人(第8代宗主)のお手紙

『御文章』

Ⅲ. 作法

1. 仏壇の荘厳法について

① 本尊：阿弥陀如来（木像・絵像・六字名号）

② 脇掛：左脇掛／親鸞聖人の御影または帰命尽十方無碍光如来（十字名号）

右脇掛／蓮如上人の御影または南無不可思議光如来（九字名号）

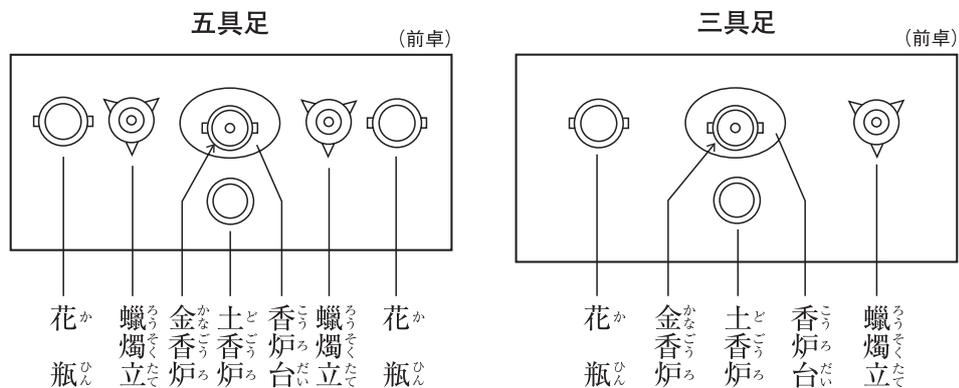
尚、お仏壇では、阿弥陀如来からみた左右で位置を示します。

自分からみて左右をいうのではないことに注意してください。

③ 五具足：報恩講法要・慶讃法要や葬儀などの儀式に用います。

花瓶一对・蠟燭立一对・香炉です。

配置は、下記の通りです（三具足は、日常の荘厳です）。



④ 仏飯：原則として、朝に供えます。お供えした仏飯は、後でいただきます（仏飯の上げ下げの時に鑿を鳴らす必要はありません）。

⑤ お花：四季それぞれの花をお供えし、毎日、水を入れ替えて清潔に保ちます（毒のある花やとげのあるもの、造花は用いません）。

⑥ 線香：浄土真宗では線香は立てません。香炉に入る長さに折って、横にしてたきます（本数に決まりはありません）。

⑦ 蠟燭：報恩講法要、その他の慶^{よろこ}びの法要等には、朱^{しゅいろ}色（または金色）の蠟燭を用います。

葬儀、祥^{しょうつきめい}月命日・月忌^{がつき}等の法要には、白色（または銀色）の蠟燭を用います。

2. 合掌・礼拝^{がっしょう らいはい}の意味

合掌・礼拝とは、阿弥^{あみ}陀如来の尊^{そんぜん}前において、常にそのお慈^じ悲^ひのなかにあることに対して、感謝の思いから行うものです。

尊前において、姿勢を正して静かに座り、合掌し、「南無阿弥^{なむあみだぶつ}陀仏（なもあみだぶつ）」と数回お念仏して、礼拝します。

3. 合掌・礼拝の仕方

- ①両手^{ねんじゆ}にお念珠をかけ、指^{そろ}を揃えて伸ばし、掌^{てのひら}を合わせます（角度は45度）。
- ②阿弥^{あみ}陀如来のお姿を見ながらお念仏^{とな}を称えます。
- ③上体をゆっくり前^{かたむ}に傾けて礼をします（角度は約45度）。
- ④静かに元の姿勢にかえってから、合掌をときます。

4. お焼香^{しょうこう}の意味

尊前にお香を供えることを供^く香^{こう}といい、お焼香はその一つです。

阿弥^{あみ}陀如来へのお敬^{うやま}いのころを、香をお供えし合掌・礼拝するという作法に表したものがお焼香です。

お焼香の際は、香炉^{こうろ}にあらかじめ炭火^{すみび}を入れておき、沈^{じん}香^{こう}や五種^{ごしゆこう}香をたきます。

5. お焼香の仕方

- ①焼^{しょう}香^{こう}卓^{じよく}の手前で一礼（角度は15度）し、左足から卓の前に進みます。
- ②右手でお香の入っている器^{うつわ}の蓋^{ふた}を取り、右側の縁^{ふち}に掛^かけて置きます。

- ③右手でお香を一回だけつまみ、焼香します（お香をいただく必要はありません）。
- ④右手でお香の入っている器の蓋を元に戻します。
- ⑤阿弥陀如来に向かって、合掌・礼拝。
- ⑥右足から卓の後ろに下がり、一礼（角度15度）して、元の場所に帰ります。

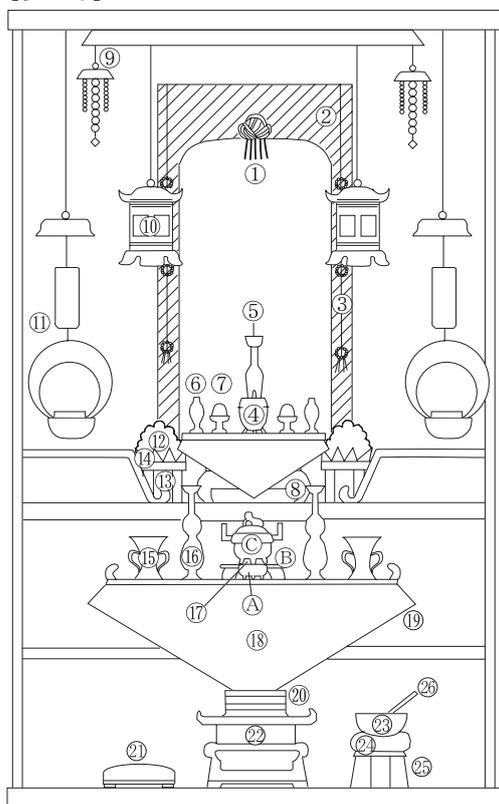
座って焼香する場合も、立ったまま焼香する場合も、基本的に動作は同じです。

6. 仏旗の意義と扱い方

「仏旗」とは「仏教をあらわす旗じるし」という意味であり、「六金色旗」ともいわれます。「六金色」とは、青・黄・赤・白・淡紅の5色と、その5色が混ざってできる色（五色混色）とを合わせた6色を指します。

これは、「広くあらゆる世界を照らして、すべてのものを救う」という「仏のはたらき（慈悲）」を表しています。様式は、縦横は2：3の比率で、横は6等分して、順に、青・黄・赤・白・淡紅の色を配し、第6分目については、さらに縦に5等分して五色混色を配しています。扱い方は国旗に準じます。仏旗の様式は、口絵の写真を参照してください。

[参考]



仏壇の荘厳

（図は、浄土真宗本願寺派におけるお荘厳のもっとも基本的な型です）

- | | | |
|--------|------------|-------|
| ①華鬘 | ⑮花瓶一対 | } 五具足 |
| ②戸帳 | ⑯蠟燭立一対 | |
| ③揚卷 | ⑰香炉 | |
| ④火舎 | A土香炉 | |
| ⑤蠟燭立 | B香炉台 | |
| ⑥華瓶一対 | C金香炉 | } 四具足 |
| ⑦お仏飯一対 | ⑱打敷 | |
| ⑧上卓 | ⑲前卓 | |
| ⑨瓔珞 | ⑳正信偈、和讃 | |
| ⑩金灯籠 | ㉑御文章箱（御文章） | |
| ⑪輪灯 | ㉒経卓 | |
| ⑫供物一対 | ㉓盤（りん） | |
| ⑬供笥 | ㉔盤ぶとん | |
| ⑭方立 | ㉕盤台 | |
| | ㉖桴（うちぼう） | |

※平常の場合と、報恩講・年忌法要などの仏事の場合、または仏壇の構造によって、図と異なる場合があります。

IV. 行事について

1. 仏教一般の行事

① 仏生会（4月8日）

「仏生会」とは、さとりを開いて仏となり、仏教を説き広められた釈尊の誕生を讃える法要です。また、「花まつり」とも「灌仏会」ともいわれます。

親鸞聖人は、釈尊がこの世にお生まれになるのは、阿弥陀如来のおこころを受けて、浄土真宗の教えを説き伝えるためであるとおっしゃっていますので、阿弥陀如来や釈尊に対して、感謝の思いから行う法要であるといえるでしょう。

「花まつり」という呼称は、釈尊が誕生される時、それを讃えるようにして、天から美しい蓮の青や紅の花弁が舞い落ちてきたと伝えられていることなどに由来しています。

同じように、「灌仏会」という呼称は、釈尊が誕生された時、それを讃えて、天から甘露の雨が降ってきたことに由来するもの、また、梵天や帝釈天といわれる仏教を守護する神々が、その誕生に際して、温水や冷水をそそいだということに由来するものなどがあります。甘茶を誕生仏にかけるという行為は、これらになぞらえて行われているものです。

② 成道会（12月8日）

「成道会」とは、釈尊が厳しい修行の後に、菩提樹のもとに端座して、一切の迷いを断ち切って、さとりを開きになったことを讃える法要です。

この「成道」という言葉は、文字通り「道を成る」ということであり、それは「さとりを完成する」という意味です。

釈尊が「成道」されたということは、さとりを完成して、「仏（仏陀）」となったということです。また、「仏陀（ブツダ）」とは、古代のインドの言葉で、「覚者（さとりを開いたもの）」ということを表しています。

③^{ねはんえ}涅槃会（2月15日）

「涅槃会」とは、釈尊が^{にゅうめつ}入滅されたことを^{きえん}機縁として行う法要です。この「入滅」という言葉は、単に命を終えるということを表しているのではなく、「完全な^{きょうち}さとりの境地に入る」という意味です。

私たちは、阿弥陀如来のおこころを受けて、この世にお生れになっている釈尊から、浄土真宗の教えを聞いています。ですから、「涅槃会」とは、阿弥陀如来をはじめ、その教えを説き伝えてくださった釈尊に、感謝の思いから行う法要です。

④^{しゆしやうえ}修正会（1月1日）

「修正会」とは、「正月に修める法会」という意味で、新しい年を迎えるにあたって、阿弥陀仏のはたらきのうちにあることに感謝し、その教えにであうための法要です。また、元旦に執り行われる法要を、「^{がんとんえ}元旦会」といいます。

⑤^{ひがんえ}彼岸会（3月・9月）

「彼岸会」の「彼岸（かの世界）」とは、^{けが}煩惱に穢れている迷いの世界をあらわす「^{しがん}此岸（この世界）」の対義語で、清らかなさとりの世界をあらわしています。浄土真宗においては、阿弥陀仏の浄土に往生された方々はもちろん、後に^{のこ}遺された私たちも、そのはたらきのうちにあつて、「さとりの世界にいたることができる」という教え（到彼岸）」にであっているのですから、そのご恩に感謝する思いで執り行う法要です。

⑥^{ぼんえ}盆会（8月15日）

「盆会」とは、「^{うらぼんえ}盂蘭盆会」ともいい、『盂蘭盆経』という経典に説かれている故事に依っています。その内容は、釈尊の十大弟子の一人で、神通第一と称されていた^{もくれんそんじゃ}目連尊者が、ある時、その神通力によって、亡き母親が^{がき}餓鬼の世界に堕ちて苦しんでいることを知ります。そして、母親を救うための方法を釈尊に尋ねると、夏に行われる修行（^{げあんこ}夏安居）が終わる7月15日に、食事の布施をするように勧められます。目連の布施の功德によって、母親は餓鬼の世界から救われたというのです。

浄土真宗においては、阿弥陀仏のはたらきのうちに、すべてのものが浄土に往生して、さとりを開くことができるのですから、餓鬼の世界に落ちるということはありません。ですから、浄土に往生した方々を偲びつつ、私たちも、そのはたらきのうちにあることに対して、報恩感謝の思いから執り行う法要であるといえるでしょう。

2. 浄土真宗の行事

①宗祖降誕会（5月21日）

「宗祖降誕会」とは、阿弥陀如来の教えを明らかにしてくださった浄土真宗の開祖、親鸞聖人の誕生を讃える法要です。

親鸞聖人の誕生は、旧暦の承安3年4月1日（西暦1173年5月21日）と伝えられていますので、本願寺では、新暦の毎年5月20日、21日に行われています。江戸時代末には、日野別堂（現在の日野誕生院）で勤められていましたが、明治7年（1874）に初めて本願寺で勤められ、明治20年（1887）には普通教校（現在の龍谷大学）で行われるようになり、派内に広く普及するようになりました。

②報恩講（1月16日）

「報恩講」とは、浄土真宗の教えを明らかにしてくださった親鸞聖人のご往生の日を縁として、そのご恩に感謝の思いからお勤めする法要です。

聖人の祥月命日にお勤めすることから、正式には、「御正忌報恩講法要」とい、浄土真宗において、もっとも大切な法要として位置づけられています。また「報恩講」という呼称は、本願寺3代宗主の覚如上人の頃から用いられています。本願寺では、毎年1月9日から1月16日までの七昼夜にわたって「御正忌報恩講法要」が行われています。

V. 釈尊の伝記

1. 誕生

釈尊は、紀元前4・5世紀頃、インドの北方、ヒマラヤ山麓^{さんろく}のカピラヴァットウに住んでいたシャカ族（釈迦族）の太子として誕生されました。父はスッドーナ^{じょうぼん}王（浄飯）、母はマーヤー（^{まや}摩耶）^{ぶにん}夫人で、誕生した子はゴータマ・シッダッタ（^{しつ}悉達多）と名づけられました。ゴータマは「最良の牛（神聖な生きもの）」、シッダッタは「目的を達成したもの」という意味です。のちには、さとりを開いて、仏陀（ブツダ）となられたので、釈迦族出身の牟尼^{むに}（^{しょうじや}聖者）という意味で「釈迦牟尼世尊^{しやかむにせそん}」と尊称され、それを略して「釈尊」と呼ばれるようになりました。

伝説によれば、マーヤー夫人が出産のために里帰りをされる途中、休息のために立ち寄られたルンビニーの花園において、夫人がアショーカ^{むゆうじゆ}（無憂樹）の枝に右手をかけたときに、太子はお生まれになり、すぐに七歩あるき、右手で天を左手で地を指さし、「天上天下、唯我独尊^{てんじやうてんげ ゆい が どくそん}（わたしは天地の間で最も尊い者となろう）」と宣言され、そのとき天から甘露^{かんろ}の雨が降ってきたと伝えられます。この伝説は、釈尊の偉大さをインドの文学的表現によって伝えたもので、たとえば「七歩あるいた」という表現は、「迷いの世界である六道^{ろくどう}（^{じこく}地獄・^{がき}餓鬼・^{ちくしょう}畜生・^{しゆら}修羅・^{にんげん}人間・^{てんじやう}天上）を超える（お方である）」ということを示しています。

マーヤー夫人は、出産の1週間後に亡くなられ、その後、シッダッタは、夫人の妹であるマハーパジャーパティニーによって育てられるのです。

2. 出家と修行^{しゆつけ しゆぎやう}

シッダッタ太子は、幼い時から、国王になるために学問や武芸を学ばれ、優れた才能^{すぐ}を発揮されます。一方で、感受性^{かんじゆせい}が強く、ものごとを深く考える性格に育っていきました。

スッドーナ王は、シッダッタ太子を心配し、物質的に豊かな生活を与えました。住むところには、季節にあった三つの宮殿を与え、その宮殿では毎晩若い女性たち

のはなやかな音楽と踊り、さらにぜいたくな食事がふるまわれました。しかしシッダッタの心は満たされることなく、ますますもの思いに沈みがちな日々を送られました。

シッダッタ太子のことを心配されたスッドーダナ王は、結婚をすすめられます。太子はヤソーダラーと結婚しましたが、深くものごとを追求める日々は変わりませんでした。やがてヤソーダラー^ひ妃との間に子どもが生まれ、ラーフラと名づけられました。

しかし、さとりを求めるために出家したいという太子の思いはますます強くなり、太子としての地位も家族への愛^{あい}着^{ちやく}もふりきって、ひそかに城を抜け出し、ついに出家者として修行の道に入られました。29歳の時であったと伝えられています。

出家の修行者となったゴータマ・シッダッタは、最初にアーラーラ・カーラーマの教えを受け、つぎにウッタカ・ラーマプッタの教えを受けました。二人の教えは、^{ぜんじょう}禅^{めいそう}定（瞑想によって心を安定させる修行）の実践によって^{くのう}苦悩を離れるというもので、シッダッタは短期間にこの境地に達しました。しかし、苦悩の解決にはつながらないものであると判断し師匠のもとを去ります。その後、ウルヴェーラー村^{くぎょうりん}の苦行林（苦行者が集まる林）において、シャカ族出身の五人の仲間たちとともに6年間にわたり苦行（肉体を苦しめることによって心を安定させる修行）を実践します。しかし、これもまた苦悩の解決にはつながらないとして、苦行を捨てられます。

苦行林から出たシッダッタは、ネーランジャラー河^{にれんぜんが}（^{もくよく}尼連禅河）で沐浴され、たまたま通りかかった村娘スジャータから^{ちち}乳^ふが^せゆの布施を受けます。シッダッタは乳がゆを食べて^{ぼだいじゆ}元^{めいそう}氣を取り戻し、菩提樹の下で瞑想に入られました。

3. ^{じょうどう}成道^{でんどう}と伝道

菩提樹の下に座って瞑想を始めて49日目の12月8日、ついにさとりを開かれ、仏陀となりました。さとり（道）を完成したということで、これを「成道」とよびます。

さとりを開かれた釈尊は、自分がさとした真理（法）を人々に伝えることを難しいと考え、一旦は^{ちゅうちよ}躊躇^{ぼんてん}しますが、^{すす}梵天の勧めに^{したが}従って、かつて6年間修行をともにした五人の出家修行者たちに、^{ろくやおん}鹿野苑（現在のヴァーラーナシー〈ベナレス〉^{こうがい}郊外）

で、初めて「仏に成るための教え（仏教）」を説きました（初転法輪）。

ここに、さとりを開かれた釈尊（仏）と、釈尊が説かれた教え（法）と、釈尊を中心とした仏道修行者集団（僧）の三つ（三宝）がそろったこととなりました。

釈尊は、以後、45年間にわたって、あらゆる人々に教えを説き伝えるために、各地を巡られるのです。釈尊はインドの社会にあった身分制度にとらわれずあらゆる人々を教化されました。その釈尊の説法は病に応じて薬を与えるように、相手に応じて巧みに説法をされ（対機説法）、釈尊を師と仰ぐ教団は大きく広がることとなりました。

4. 入滅

釈尊は伝道の旅の途中、80歳の時、病に倒られますが、心配する仏弟子たちに、次のように語られています。「真実の自己を確立するためには、自らをたよりとして他人をたよりとしてはない（自灯明）、法をよりどころとして他のものをよりどころとしてはない（法灯明）」とおっしゃっています。さらに病をおして旅を続けられ、最後はクシナガラ（鹿野苑）の沙羅樹のもとに身を横たえられ、入滅されました。

最後のお言葉は、「世は無常である。怠りなく努力せよ」であったといわれています。仏弟子たちは、遺された釈尊の言葉を胸に、真実の教えである仏法をよりどころとして、真摯に自らと向き合いながら、仏道を歩んで行くのです。

インド仏教史蹟略図



※『註釈版聖典』より引用

VI. 仏教の教え

1. 仏教のめざすもの

「仏教」は「仏に成るための教え」です。「仏に成る」とは、私たちの持っている自己中心的なものの見方（執着^{しゅうじゃく}）を捨て、ものごとをありのままに見るということです。

「仏教」では、私たちのかかえている苦しみの原因が、自分の外側にあるのではなく、自分の内側にある自己中心的なものの見方（執着）にあると説きます。

釈尊は、すべてのものために、苦しみから解き放たれる教え、つまり「仏教」を説かれています。いま私たちにとってもっとも大切なことは、その教えを聞くことであるのです。

2. 縁起の教え（仏教の根本原理）

「縁起」とは、釈尊が菩提樹^{ぼだいじゆ}のもとでさとられた内容を表しています。その意味は「すべてのものは因^{いん}と縁^{えん}によって起こっている」ということです。

仏教では、「すべてのものは、直接的な原因（因）と間接的な原因（縁）とが互いに支え合い、一時的に成立している」と考えます。

因（直接的な原因）と縁（間接的な原因）によって果（結果）が生じているという法則（真理）は、現代の科学的なものの見方や考え方も矛盾^{むじゆん}しない考え方であるでしょう。

そして、釈尊が「縁起」の教えを説かれるのは、「迷いからさとりに至るための真理を示すため」であり、それは、「さまざまな苦悩の起こっている原因を明らかにすることによって、さとりを開くための筋道^{すぢみち}を説き示すため」であるのです。

3. 四諦（四つの真理）と八正道（八つの実践方法）

釈尊の説法の内容は、「中道」という教え（欲望や苦行のみを追求するという両極^{りょうきよく}

端^{たん}の道から離れる教え)であり、さとりを開くための方法として「八正道(八聖道)」(八つの実践方法)を示し、そして、「四諦」(四つの真理)を説いていらっしゃいます。

「諦」という字は、「真実」「真理」という意味で、「四諦」は「四つの真理」ということを表します。具体的には「苦諦」「集諦」「滅諦」「道諦」の四つです。

これら四つの真理は、「迷いの因果^{いん が かんけい}関係」と「さとりの因果関係」を説明したものです。「迷いの因果」とは、無明^{む みょうぼんのう}煩惱という原因(集諦)が、苦しみという結果(苦諦)を生じさせているということです。「さとりの因果」とは、八正道という原因(道諦)が、涅槃^{ね はん}という結果(滅諦)をもたらすということです。ここで注意しなければならないことは、「道諦」の具体的な内容が「八正道」にあたるということです。

「八正道」とは、苦しみを消滅させるための八つの実践方法のことです。そのなかでも「正見^{しょうけん}」は、もっとも重要で、「八正道」の実践の基本となるものです。これらは、「欲望に身を任せることや、苦行によって自ら^{みづか}を苦しめるという両極^{りょうきよく}の道から離れる実践方法(中道)」です。これは、釈尊自身の経験がもとになっています。

①四諦の意味

苦 諦：人生は苦しみに満ちているという真理。

「苦諦」とは、「人生の思い通りにならない現実を苦であるとありのままに見る」ということで、具体的には「四苦八苦^{しきくはっく}」として示されます。

このうち、「四苦」とは、「生苦^{しょうく}(生れる苦しみ)・「老苦^{ろうく}(老いる苦しみ)・「病苦^{びょうく}(病気になる苦しみ)・「死苦^{しきく}(死ぬ苦しみ)」の四つをいいます。

さらに、この「四苦」に、「怨憎会苦^{おんぞうえく}(怨み憎むべきものと会う苦しみ)・「愛別離苦^{あいべつりく}(愛すべきものと別れ離れる苦しみ)・「求不得苦^{ぐふとっく}(求めるものが得られない苦しみ)・「五蘊盛苦^{ごうんじょうく}(私たちを形成している肉体的^{にくたい}・精神的^{せいしんてき}な苦しみ)」の四つを加えて「八苦」といいます。

集諦じつ たい：苦しみには原因があり、それは欲望であるという真理。

「集諦」とは、苦しみの原因を示したものです。その原因を指して、真理に明るくないという意味から「無明むみょう」ともいい、また、それは、私たちの心にわき起るさまざまな執着しゅうじゃく こんげんの根源であることから、「無明むみょう 煩惱ぼんのう」ともいわれます。

滅諦めつ たい：苦しみの原因である欲望を消滅させた理想的な状態ねはんが涅槃であるという真理。

「滅諦」とは、めざすべきさとりさとりの境地のことで、「涅槃」といいます。「涅槃」とは「煩惱の火の吹き消された状態」のことです。

道諦どう たい：涅槃に到達するための実践方法があるという真理。

「道諦」とは、「涅槃」に至るための実践方法で、具体的には「八正道」を指しています。

②八正道はっしょうどうの意味

しょう けん	しょう けんかい	しょう しゆい	しょう しこう	しょう ご	
正 見	…正しい見解。	正 思惟	…正しい思考。	正 語	…正しい言葉。
しょう こう	しょう みよう	しょう みよう	しょう しょうじん		
正 業	…正しい行い。	正 命	…正しい生活。	正 精進	…正しい努力。
しょう ねん	しょう おくねん	しょう じょう	しょう めいそう		
正 念	…正しい憶念。	正 定	…正しい瞑想。		

4. 法印ほういん (三法印さんほういん・四法印しほういん) について

法印とは「仏法のはたじるし旗印」のことで、「仏教の教えのとくちょう特徴」を意味します。

三法印とは、仏教の教えの特徴を三種でまとめたもので、具体的には「諸行無常しよぎょうむ じょう」「諸法無我しよほうむ が」「涅槃寂静ねはんじゃくじょう」を指します。また、これに「一切皆苦いっさいかい く」を加えたものを四法印と呼びます。

①諸行無常しよぎょうむじょう…すべてのものは無常である。

「無常」とは、すべてのものは移り変わるということ。

② 諸法無我…すべてのものは我（実体）でない。

「我」とは、生滅変化を離れた永遠不滅の実体のこと。

③ 涅槃寂靜…涅槃は究極の安穩の世界である。

「涅槃」とは、煩惱の火の吹き消された状態のこと。

④ 一切皆苦…すべての現象は苦しみである。

Ⅶ. 親鸞聖人の伝記

1. 誕生

親鸞聖人は、藤原氏一族である日野有範^{ひのありのり}の長男として、承安^{じょうあん}3年4月1日（西暦1173年5月21日）に、京都の南、日野の里（現在の日野誕生院^{ひのたんじょういん}の付近）で、ご誕生になりました。幼名^{ようみょう}は、松若麿^{まつわかまろ}、松若殿^{まつわかどの}、松若丸^{まつわかまる}などと伝えられています。

2. 出家

9歳の時に、慈鎮和尚^{じちんかしょう}（慈円^{じえん}）について出家して、範宴^{はんねん}と名のり、以後、20年間にわたって比叡山^{ひえいざん}で修学し、常行三昧堂^{じょうぎょうざんまいどう}の堂僧^{どうそう}などをつとめられていました。

3. 法然聖人とのであい

自力の教えにしたがって、さとりを開こうとしても、煩惱を断ち切ることができず、大きな壁^{ちやくめん}に直面^{ちよくめん}していらっしゃった聖人は、建仁元年^{けんじん}（1201）、29歳の時に、比叡山^{ひえいざん}を下り、京都の六角堂^{ろっかくどう}に参籠^{さんろう}しておられました。そこで、聖徳太子の夢のお告げを受けて、吉水^{よしみず}の法然聖人^{ほうねんしょうにん}を訪ねられます。そして、阿弥陀如来の教え^きに帰して、その門弟^{もんてい}となられるのです（綽空^{しゃくくう}と名のられます）。

元久2年^{げんきゅう}（1205）には、法然聖人^{ほうねんしょうにん}の主著^{しゅちよ}である『選択本願念仏集^{せんじゃくほんがんねんぶつしゅう}（選択集^{せんじゃくしゅう}）』の書写^{しよしゃ}を許されるとともに、恩師^{おんし}の真影^{しんねい}（肖像画^{しやうざうが}）を図画^{ずが}していらっしゃいます。このことは、法然聖人のお示しになる阿弥陀如来の教えを、親鸞聖人が正しく受け継がれていることを表しています（善信^{ぜんしん}と名を改められます）。

4. 念仏弾圧のなかで

親鸞聖人は、法然聖人のもとで学ぶ間に、恵信尼^{えしんに}さまとご結婚されたと考えられています。建永2年^{けんえい}（承元元^{じょうげん}・1207）、お念仏の教えを喜んでいる人々が弾圧され

る事件が起り（^{じょうげん ほうなん}承元の法難）、^{しよばつ}親鸞聖人も、^{るざい}法然聖人らとともに^{しよ}処罰され、^{しよ}流罪に処せられて、^{えちごこくぶ}越後国府（現在の新潟県上越市）に^{おもむ}赴かれています（この頃から^{ぐとく}愚禿と名のられます）。

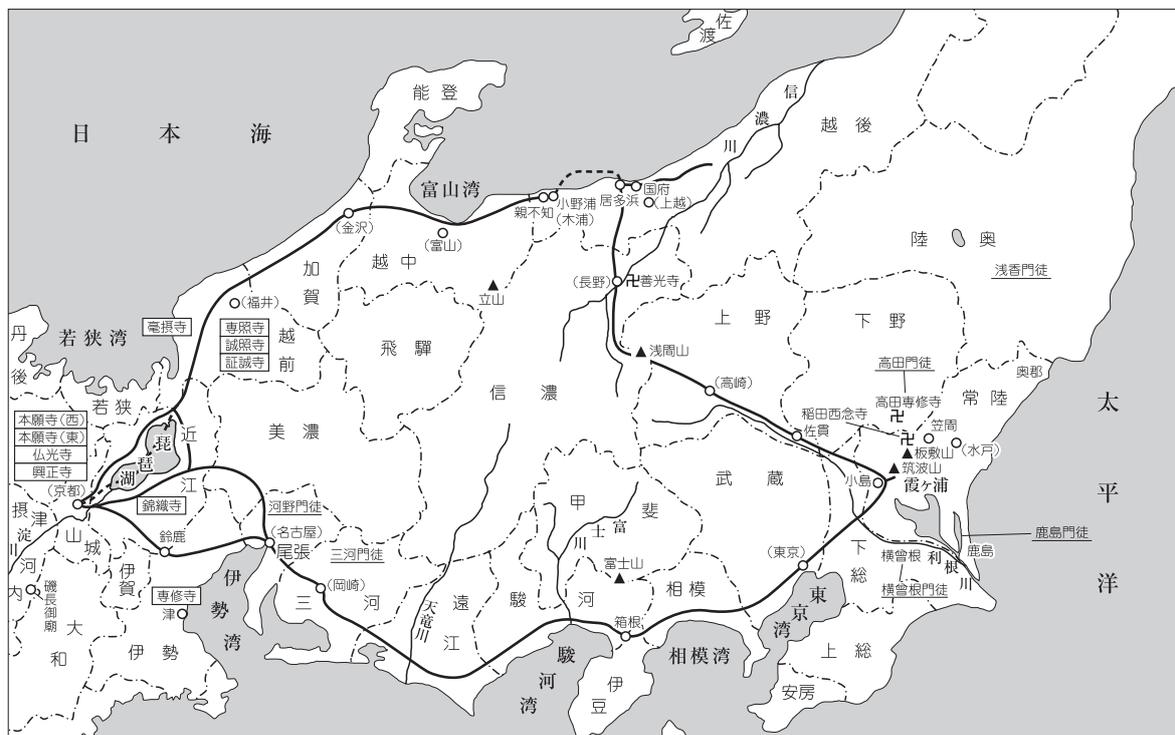
^{けんりやく}建暦元年（1211）に^{しゃめん}赦免されると、^{けんぼう}建保2年（1214）に、^{さいし}妻子とともに関東に移住し、^{ひたちのくにいなだ}常陸国稲田（現在の茨城県笠間市稲田）を中心に、^{はげ}伝道に励まれます。そして、^{ひっせい}聖人畢生の書となる『^{けんじょうど しんじつきょうぎょうしやうもんるい きやうぎやうしんしやう}顕浄土真実教行証文類（^{あらわ すいこう}教行信証）』を^{あらわ}著して、^{すいこう}推敲を重ねられるのです。

なお、^{しゅちよ}浄土真宗では、^{げんにん}聖人の主著である『教行信証』に記される^{げんにん}元仁元年（1224）を^{りつきやうかいしゅう}立教開宗の年と定めています。

5. 往生まで

62、3歳の頃、^{ひんぱん}京都にお戻りになると、^{ごしやうそく}頻繁にお手紙（御消息）をしたため、多くの^{ちよさく}著作を記しては、^{きやうけ}関東の門弟の教化に力を尽していらっしゃいます。そして、^{こうちやう}弘長2年11月28日（西暦1263年1月16日）に、^{じんう ぼうしや すみのぼう}弟の尋有の坊舎（現在の角坊にあたりといわれる）で、90年の生涯を終えられるのです。

親鸞聖人史蹟略図



※『註釈版聖典』より引用

VIII. 真宗の教え

1. 阿弥陀如来の本願^{ほんがん}

「本願」の「願」とは、「仏（さとりを開いた方という意味です）」となる前、「菩薩^{ぼさつ}」である時に立てる「(どのような仏になりたいのかという) 願い」のことです。「仏になる」ということは、「さとりを開くこと」ですが、それは「他の人々も救うというはたらきを身にそなえる」ということです。

阿弥陀如来という仏となる前のお名前は、法蔵菩薩^{ほうぞうぼさつ}といます。法蔵菩薩でいらっしやった時にお立てになった「願い」は、四十八種類ありますので、これを「四^し十^{じゅう}八^{はち}願^{がん}」と呼んでいます。

このなか、もっとも大切な願いを「本願」といい、それは第十八番目に誓われている願いです（第十八願^{だいじゅうはちがん}と呼んでいます）。そして、そこには、「すべての人々が心から信じ喜んで、わたしの国に生れたいと願い、わずか十回でも念仏して、もし生れることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません」と誓っていらっしやいます。

この「本願」をお立てになっている法蔵菩薩は、すでに阿弥陀如来となっていちゃいますので、阿弥陀如来は、その本願に誓われている通りに、私たちに、信じ喜ぶという心を恵み与えようとしてはたらきかけていらっしやるのであり、また、それが、お念仏となって、あふれでているということなのです。

2. 阿弥陀如来と釈尊

私たちは、「浄土真宗の教え」を誰から聞いているのでしょうか。もちろん「浄土真宗」のころを広くあきらかに示してくださったのは、親鸞聖人です。それでは、親鸞聖人は、誰からお聞きになったのでしょうか。そうすると、「それは、師匠の法然聖人である」と考えることもできますが、その法然聖人は、誰からお聞きになったのでしょうか。

このようにして、つきつめて考えますと、「浄土真宗の教え」は、釈尊から聞い

ているということになるでしょう。

釈尊は、約2500年前にインドにお出ましになって、さとりを開かれている仏です。一方、阿弥陀如来は、浄土じょうどにいらっしゃる仏です。

このことについて、「浄土三部経じょうどさんぶきょう」のひとつである『仏説無量寿経ぶつせつむりょうじゆきやう』というお経の題を見てみましょう。そこには、「仏が説かれたもの」という意味で、「仏説」という語が付いていますが、この「仏」は釈尊を指しています。続いて、「無量寿」とありますが、これは阿弥陀如来を指しています。そうすると、お経の題の意味は、「釈尊によって説かれた阿弥陀如来の教え」ということになります。

実は、釈尊が阿弥陀如来の教えをお説きになるのには、理由があるのです。それは、阿弥陀如来が法蔵菩薩と名のって修行されていた時に、「わたしが阿弥陀如来となったなら、あらゆるものを救い取るために、はたらきかけているということを知らせたい。そして、あらゆるものが、心から信じ喜んで、わたしの国に生れることができるようにしたい」という願いを立てられていました。

ですから、釈尊は、その願いに応じるかたちで、私たちに阿弥陀如来のおこころを伝えていらっしゃるということなのです。阿弥陀如来は、菩薩であったときに立てられた願いの通りに、その身にそなわる功德くどくのすべてを、私たちにそそいでいらっしゃいます。

私たちは、釈尊の説法せっぽうによって、はるか2500年の時を超えて、阿弥陀如来の願いを聞き、そして、親鸞聖人のお導きによって、阿弥陀如来のはたらきのうちに救い取られているという「教え」にであっているのです。

3. 聞くということ

浄土真宗において、「聞く」ということには、特別な意味があります。それは、阿弥陀如来が、私たちが救い取るために、どのような「願い」をお立てになっているのか、そして、その「願い」の通りに、仏となって、どのようにして、はたらきかけていらっしゃるのかということを「疑いなく聞く」ということです。

「疑いなく聞く」ということは、「私が信じる」ということではありません。私が、どれだけ信じているといっても、それは、どこまでも不確かなものでしかありません。なぜなら、私たちの心は、さまざまな状況のなかで、つねに揺れ動いているか

らです。

ですから、第十八願に「あらゆるものが、心から信じ喜んで、わたしの国に生れることができるようにしたい」と誓っていらっしゃるように、阿弥陀如来は「(疑いなく) 信じる心」を与えようとしていらっしゃるのです。

このように、「(阿弥陀如来の願いを) 聞く」ということは、阿弥陀如来のはたらきによって「(疑いなく) 信じる心」を恵み与えられるということを表しているのです。

浄土真宗において「聞く」ということは、私の心はあてにならない不確かなものであることを「聞く」とともに、そうした心のもち主である私をめあてに、阿弥陀如来がはたらきかけていらっしゃるということを「聞く」ということであるのです。

IX. スカウトの心得

1. 「教章」の「生活」の意味

「教章（生活）」には、次のように記されています。

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歡喜のうちに、現世祈禱などによることなく、御恩報謝の生活を送る。

（「浄土真宗の教章（私の歩む道）」の「生活」参照）

この意味は「親鸞聖人の明らかにされている浄土真宗の教えにしたがって、阿弥陀如来の『本願』のおこころを聞いて、常に、自らのものの見方や考え方の危うさを振り返り、そうした私たちを常につつんでいらっしゃる阿弥陀如来に対して、感謝の思いからお念仏するスカウトとなりましょう」ということです。そして、「占いや祈禱（おいのり）に惑わされることなく、浄土真宗の教えを聞いて、生活してゆきましょう」ということです。

2. 「教章」の「宗門」の意味

「教章（宗門）」には、次のように記されています。

この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによって、自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する。

（同「宗門」参照）

この意味は「親鸞聖人の明らかにされている浄土真宗の教えを聞いている私たちは、ともに揺れ動く危うい心をもっているものであり、ともに阿弥陀如来の救いの

めあてとなっている仲間である」ということです。私たちは、そうした思いで、すべての人々とつながっているのであり、「互いに助けあい、敬いあって生きてゆかなければならない」ということを表しています。

X. 浄土真宗の生活信条

一、^{ほとけ}み^{ちか}仏の^{しん}誓いを信じ

^{とうと}尊^ないみ^な名をと^{なえ}えつつ ^{つよ}強^{あか}く^い明^ぬるく^ぬ生き^ぬ抜^ぬきます

一、^{ほとけ}み^{ひか}仏の^{ひか}光りを^あお^おぎ

^{つね}常^みに^みわが^み身^みを^かえ^りみ^て ^{かんしゃ}感^{しや}謝^{はげ}の^うち^にに^{はげ}励^みま^す

一、^{ほとけ}み^{おし}仏の^{おし}教^ええ^にに^した^がい

^{ただ}正^{みち}しい^き道^きを^き聞^きわ^けて ^まま^この^のみ^のり^をを^ひろ^めま^す

一、^{ほとけ}み^{めぐ}仏の^{よろこ}恵^{よろこ}みを^{よろこ}喜^ぶび

^{たが}互^{たす}いに^{たす}う^{たす}や^{たす}まい^{たす}助^{たす}け^{たす}あ^{たす}い ^{しゃかい}社^つ会^くの^ため^にに^つく^すし^まま^す